

# 考古資料からみた朝鮮諸国と倭

The Interaction between the Ancient States in Korea and Wa  
Viewed from the Archaeological Materials

吉井秀夫

はじめに

① 竪穴式石槨の展開と外来系考古資料

② 横穴式石室の展開と外来系考古資料

おわりに

## 【論文要旨】

本稿では、加耶地域が、倭や朝鮮半島の周辺諸地域とどのような交渉関係を結んだかを明らかにするための一つの試みとして、竪穴式石槨と横穴式石室が主たる埋葬施設として用いられた段階の加耶地域の墓制における、外来系考古資料の様相について検討をおこなった。まず竪穴式石槨が埋葬施設として用いられた段階では、加耶地域内やその隣接地域から土器の搬入がみられる他、倭・百済・新羅系の考古資料が存在する。ただし、それらが墓制全体に占める割合は限られている。また、池山洞古墳群と玉田古墳群では、影響を受けた地域と、墓制に対する影響の大きさに違いが見出された。次に、横穴式石室が主たる埋葬施設として採用される段階では、埋葬施設の構造が変化しただけではなく、葬送観念にも大きな変化が認められる。また副葬品において外来系考古資料が占める割合も増加する。こうした変化については、百済からの影響が指摘されてきたが、新羅・倭からの影響も少なからず見出される。中でも倭系考古資料が目立つ墳墓については、栄山江流域の前方後円形墳の様相との対比から、被葬者を大加耶支配下の倭系集団とみる説が提出されている。しかし、それ以前から古墳が築造されてきた古墳群や日本列島でも、同様の変化がみられることを念頭において、墓制の変化の類型化とそれに対する解釈がおこなわれる必要があると考えられる。

## はじめに

1980年代以降に発掘調査が進行し、これまで知られていなかった多様な遺構・遺物が発見されたことを契機として、大韓民国における加耶史研究は大きく進展した。またその調査研究成果は、日本考古学界でも注目を浴びることになった。それは、それまで日本において漠然と「渡来系」とされてきた考古資料と対比できる資料が、加耶地域で少なからず見つかったからであろう。1990年代に入り、洛東江流域の各地で倭系と考えられる資料が少なからず発見されるようになると、日本考古学者の加耶に対する関心はさらに高まり、また日韓の研究者間の人的交流も活発になった。2002年3月に国立歴史民俗博物館で開催されたシンポジウムは、日本の考古学者が関心を抱いてきた加耶に関する諸問題を集大成する貴重な機会であったといえよう。

ただ、そうした考古資料自体に対する関心の高まりにくらべて、日本考古学界において加耶に対する歴史観や研究視角がどれだけ深められてきたのかについては、検討の余地があるように思われる。例えば「加耶」という名称は、「倭」と対置される社会的・政治的なまとまりをもつ単一の地域・集団を表すものとして語られてきたのではないだろうか。最近の韓国考古学界では、考古資料や文献資料の分析を通して、加耶地域内に複数の文化圏が存在することが想定され、その時空的な変遷や地域間関係の変化について、かなり細かな議論が進行している。そうした現状からみたとき、日本考古学においても、「加耶」を一つのまとまりとしてとらえるのではなく、その中における文化の小地域性の存在を念頭において研究をすすめていく必要があると考える。またそうした視角は、対外交渉史を検討する上で「加耶」の交渉相手として前提されてきた、「倭」における地域性の認識の問題を見直すことにつながるはずである。

もう一つ留意しなければならないのは、加耶と倭との関係が強調されるあまり、結果的に加耶と倭以外の周辺諸地域との関係に対して、十分な関心ははらわれてこなかったのではないかと、という点である。加耶にとって、倭との関係が一定の重要性をもったことは、考古資料や文献資料を通して知ることができる。しかし、新羅・百濟・高句麗、さらには中国との関係も、同等、あるいはそれ以上に重要であったはずである。倭と加耶の交渉関係を主題とする場合も、加耶にとって倭が複数の交渉相手の一つに過ぎなかった点は、もっと意識する必要があるのではなからうか。

こうした問題に留意しつつ、加耶をはじめとする朝鮮諸国と倭の間における対外交渉の変遷と、その歴史的意義を明らかにしていくための一つの試みとして、本稿では、加耶地域における諸集団間の関係や、周辺諸集団との関係の変化の様相を概観することにより、加耶と倭の交渉関係の相対化をおこなってみたい。具体的に取り上げるのは、加耶地域でつくられた墳墓の埋葬施設の構造と埋葬方式、そして副葬品にみられる外来系考古資料である。加耶地域の墳墓において、こうした外来系考古資料が地域的・時期的にどのような展開をみせるのかを検討することを通して、加耶における倭系考古資料がどのように評価できるのかを考えることにする。ただし、4世紀を中心とする大型木槨墓が築造された段階については筆者自身が十分な検討をおこなっていないので、本稿では、竪穴式石槨が主たる埋葬施設として採用され、高塚古墳が本格的に築造される段階から、横穴式石室が埋葬施設として本格的に採用される段階までを扱う。また、本稿で用いる加耶地域とは、原則

として現在の慶尚道のうち高霊以南の洛東江以西地域を指すことを断っておく。

## ①…………… 竪穴式石槨の展開と外来系考古資料

### 1 竪穴式石槨を通して見た加耶墓制の小地域性

洛東江流域では2世紀半ばに出現したと推定される大型木槨墓は、副葬品の増加と軌を一にして副葬をもつようになる。そして、その平面形態や床面の構造からみいだされる地域性が顕著になる[李在賢 1994]。こうした大型木槨を埋葬施設とする墳墓が数多く築造された大成洞古墳群の築造が終わる頃から、洛東江流域における首長層の墳墓の埋葬施設として登場するのが竪穴式石槨である。特に加耶地域では、幅にくらべて長さが長い竪穴式石槨が分布していることが知られている。その小地域性と展開については、調査の粗密はあるものの、最近の研究の進展によりある程度の見通しが立てうる段階に達している。

竪穴式石槨墓のうち、その墓制の特徴や地域的な展開についてもっとも調査研究が進んでいるのが、高霊池山洞古墳群を典型例とする大加耶系墓制である[金鍾徹 1982, 金世基 1995]。この墳墓では、地山を掘削した墓壙内に、幅にくらべて長さの長い平面細長方形の竪穴式石槨がつけられる。石槨の中央部には釘と鏝を用いた木棺が据え付けられており[吉井 2000]、その内部には被葬者と装身具・大刀などが、外側には高霊様式土器や馬具類、ミニチュア農具類などが納められた。主石槨の周囲には、副葬品を納めた副槨と、殉葬者を安置したと推定される小石槨がつけられ、最終的にそれらを覆うように円形の盛土がなされる。同様の特徴をもつ墳墓は、高霊を中心として、陝川・咸陽から現在は全羅北道南原市に属する雲峰高原にまで分布する。こうした広がりについては、大加耶の政治的な広がりを反映すると考える説が提出されてきた[朴天秀 1996・2000a]。しかし、竪穴式石槨の構造や高霊様式土器など副葬品の組合せの違いを指摘して、大加耶の広がりやその中における集団間関係の評価について再検討をうながす意見もあり[趙榮濟 2002]、今後さらに議論が深められる必要がある。

大加耶系墓制にくらべて分布範囲は狭いものの、それらとは異なる墓制が広がる地域も確認されている。例えば、阿羅加耶の中心的な古墳群と比定されてきた咸安末伊山古墳群における特徴的な竪穴式石槨は、壁面に「龕室」と呼ばれる穴をもつ。被葬者は、石槨の一方の短壁に寄せて主軸に平行に安置され、副葬品がおかれる空間では、主軸に直交して数名の殉葬と推定される人骨がみつかることが少なくない。副葬される土器も、在地の特徴的な土器群である[李柱憲 2000b]。固城の栗垈里古墳群・松鶴洞古墳群・内山里古墳群では、まず墳丘の築造がおこなわれ、その中に複数の竪穴式石槨を築造するという特徴をもつ古墳が分布する[吉井 2002b]。副葬される土器は、固城・泗川などを中心として分布する小加耶様式土器[尹貞姫 1997]が主体を占める。ただし、これまでみつかった古墳では、高霊・新羅など他地域の土器が一定の比率で含まれている。この他、後述するように、陝川の東部に位置する玉田古墳群では、主槨と副槨の間が隔壁で区切られ、長さにくらべて幅が広い竪穴式石槨が、高塚古墳の埋葬施設として採用されている。

以上のような墓制の小地域性は、土器の小地域性ともある程度重なっている。そして、こうした考古資料の地域性を手がかりとして、文献にみられる加耶諸国の動向を復元しようとする研究が、

韓国の考古学・古代史研究者により進められてきた。ただ、複数の考古資料の間で、その時空的な展開が一致しない部分も少なからずあり、それらをどのように総合していくのかについては課題が多い。とりあえず本稿では、竪穴式石槨が用いられた段階において、考古学的文化によって「加耶」という名称で特定の地域を把握することが容易ではないことを指摘した上で、加耶地域における墓制の小地域性を念頭において、以下の議論を進めていくことにする。

## 2 外来系考古資料の様相

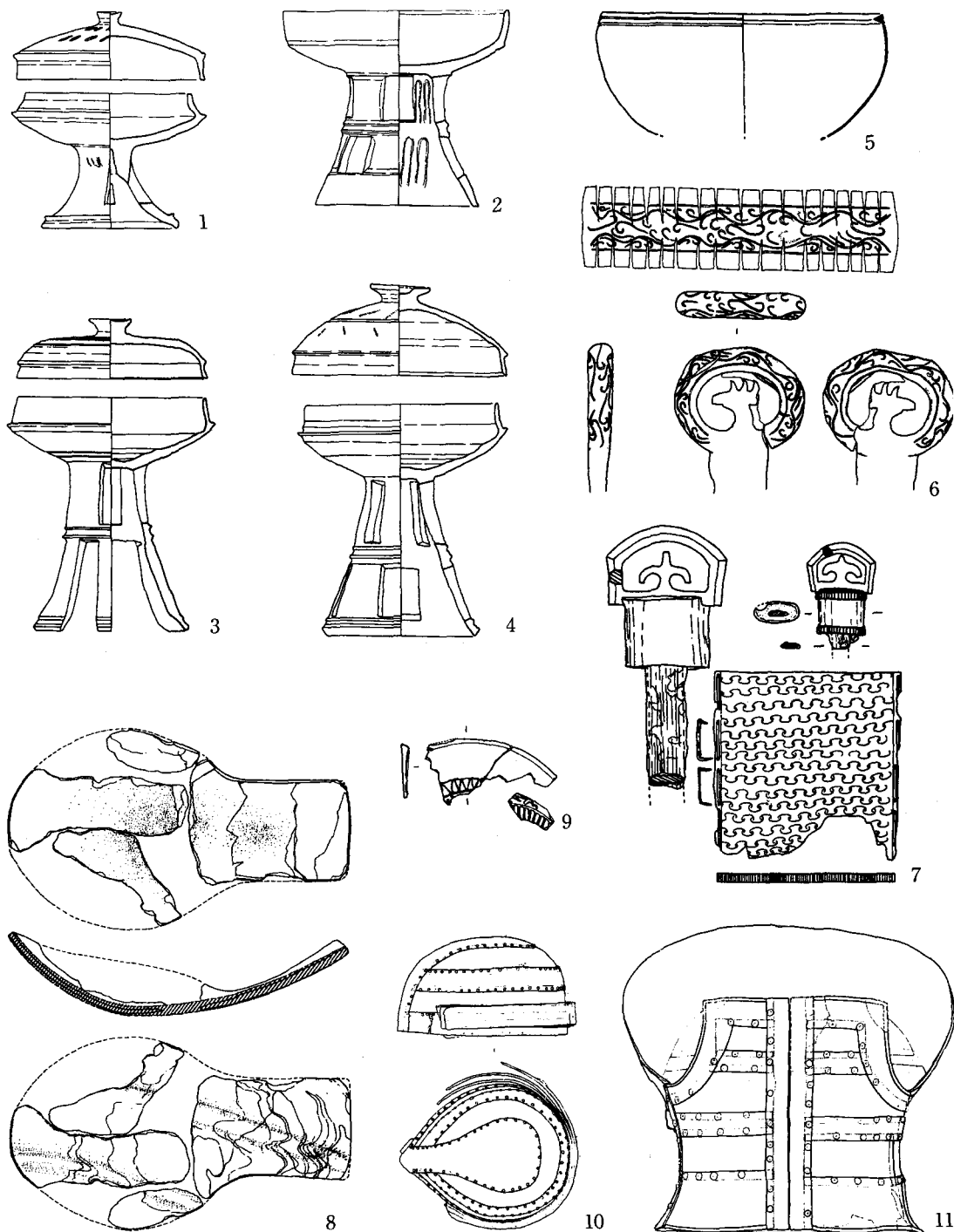
竪穴式石槨が主たる埋葬施設として用いられた段階における墳墓には、墓制の分布圏以外の地域からもたらされた、あるいはその影響によりつくられたと思われる考古資料が存在する。本稿ではこうした資料を外来系考古資料と呼ぶことにする。外来系考古資料は、それらがもたらされた地域との距離や関係の違いにより、二つに分けることができる。一つは、加耶地域内の異なる墓制分布圏、もしくは隣接する地域からもたらされたと考えられるものである。もう一つは、百済・新羅・倭など、地域的に離れている集団からもたらされたと考えられるものである。こうした2種類の外来系考古資料が加耶地域の墓制においてどのような位置を占めたのかを、二つの古墳群をとりあげて検討してみたい。

### 池山洞古墳群の場合

まず、当時の加耶地域を代表し、大加耶系墓制の代表的な古墳群である高霊池山洞古墳群の様相を検討してみたい。1910年の関野貞による調査〔関野1911〕以来の発掘調査を通して、この古墳群からは少なからずの外来系考古資料が発見されている。

まず、隣接した地域との関係を知ることができる考古資料としては、土器類をあげることができる。たとえば池山洞32号墳〔金鍾徹1981〕からは、洛東江以東様式の有蓋高杯(図1-3・4)が出土している。また、大加耶歴史館建設に伴う調査〔鄭昌熙他2000〕では、固城周辺(図1-1)や洛東江以東地域(図1-2)と関係すると考えられる土器の出土が報告されている。これらの土器が搬入品なのか、他地域からの影響を受けて高霊周辺で生産されたものなのかは、個別の検討が必要である。しかしいずれの場合でも、こうした土器は少数であり、副葬土器の大部分は高霊様式土器が占める。

それ以外の地域からもたらされたものとしては、百済系・新羅系・倭系の資料をあげることができる。まず百済系の考古資料のうち搬入品の可能性があるものとしては、池山洞44号墳出土の銅鏡(図1-5)がある〔李漢祥1994〕。一方、池山洞32NE-1号石槨出土の単龍環頭大刀(図1-6)に施された銀象嵌は、天安花城里a-1号墓出土銀象嵌環頭大刀など百済での象嵌技術の出現時期や系統からみて、百済からの影響が想定できる〔金吉植1991〕。また、轡を中心とする馬具類においても、百済との関係が指摘されてきた〔成正鏞2002〕。これらの遺物の中には搬入品も存在すると思われるが、何らかの形で技術移転がおこなわれた結果、在地で生産されたものである可能性も高い。両者の区別は今後の課題であるが、被葬者の階層差をよく反映すると思われる副葬品の生産・供給において、百済からの影響が大きな役割を果たした点に注目しておきたい。一方、新羅系の資料としては、池山洞45号墳〔金鍾徹1979〕から発見された三葉文環頭大刀・刀子(図1-7)があげられる。



1 大加耶歴史館敷地内 2号石槨墓 2 大加耶歴史館敷地内 44号石槨墓 3・4・10・11 32号墳  
5・8 44号墳 6 32NE-1号墓 7・9 45号墳

图1 池山洞古墳群出土外来系考古資料

(1~4: 縮尺約 1/5, 5~9: 縮尺約 1/3, 10・11 縮尺約 1/10)

倭系の考古資料としては、池山洞44号墳〔尹容鎮1979〕出土の夜光貝製匙（図1-8）、池山洞45号墳出土の仿製鏡片（図1-9）、池山洞32号墳出土の横矧板鋌留衝角付冑（図1-10）・横矧板鋌留短甲（図1-11）、嶺南文化財研究院発掘地区〔朴升圭他1998〕I-3号墳出土眉庇付冑などがあげられる。大型木槨墓が築造された段階では、倭系の考古資料は金海・釜山など朝鮮半島の南東海岸地域に集中する傾向がみられる。それに対して、池山洞古墳群にこのような倭系考古資料が出土することは、内陸に位置する池山洞古墳群の被葬者集団が、直接・間接に倭との交渉関係をもつようになったことを示している。ただ、夜光貝製匙のように、その産地である南島地域から九州経由でもたらされた可能性が指摘されている遺物もある〔木下2001・2002〕。倭との関係といっても、大和政権の中心勢力との直接的な交渉だけではなく、北部九州勢力が介在したり、あるいは独自で池山洞古墳群の被葬者集団と直接交渉した場合も想定する必要があるだろう。

以上のような外来系考古資料の出土を通して、池山洞古墳群の被葬者集団が、周辺諸地域とさまざまな交渉をおこなっていたことを推定できる。このうち、主に土器の搬入で示される隣接地域との交渉関係は、原三国時代やそれ以前の時期からも同様の現象がみられるものであり、長期継続的におこなわれた集団間の人的交流関係の一端を示している可能性がある。一方、新羅や倭の間では、環頭大刀・夜光貝製匙など、高霊地域内では製作されず、入手可能な階層に限られたと思われる遺物の搬入が認められる。こうした遺物の搬入の背景としては、各地域において社会的・政治的な中心となりつつあった首長層間の交渉の存在が想定される。さらに百済と池山洞古墳群の被葬者集団の間では、環頭大刀や装身具などのいわゆる威信財製作における技術移転の存在が想定され、両者の関係はより緊密なものであったと想定できる。池山洞古墳群の被葬者集団にとって、倭は竪穴式石槨墓が築造される段階に本格的な交渉をはじめた地域であり、搬入遺物の様相を考えれば、重要な交渉相手の一つであったとみてよかろう。しかし、技術移転を含んだ多くの影響を受けた百済との交渉とは違い、池山洞古墳群の被葬者集団にとって、倭は文物の供給や技術移転を通して影響を与える関係であったと思われる。また、この段階の外来系考古資料は、いずれも池山洞古墳群の墓制を大きく変化させる存在ではなかったことにも注意しておきたい。

#### 玉田古墳群の場合

もう一つの例として、文献記録にみられる多羅国の中心的な古墳群と考えられている、陝川玉田古墳群の場合をみてみたい。玉田古墳群は、慶尚大学校博物館による長年の調査によって豊富な副葬品が発見され、加耶地域を代表する古墳群として日本考古学界に紹介されてきた。しかしこの古墳群における墓制の展開や外来系考古資料の様相は、池山洞古墳群とはかなりの違いをみせる。

玉田古墳群では、竪穴式石槨が本格的に採用される段階に、それまでの墓域の西側で高塚古墳の築造がはじまる〔趙榮濟1996〕。その最初の段階にあたるM1～M3号墳〔趙榮濟他1990・1992〕は、池山洞古墳群にみられる大加耶系の竪穴式石槨にくらべて幅が広く、主槨と副槨の間を隔壁で仕切る構造をもつ。こうした構造は、加耶地域よりも、むしろ昌寧桂南里1・4号墳〔李殷昌他1991〕のような洛東江以東地域の古墳に類例を求めることができる〔洪潛植1994〕。M1・M2号墳の場合、副葬土器の大部分は洛東江以東の昌寧で主体的にみられる土器（図2-1）である。さらに、唐草文が透彫された帯金具（図2-3）や燕尾形杏葉（図2-2）は新羅系と考えられ、M1号墳で発見された

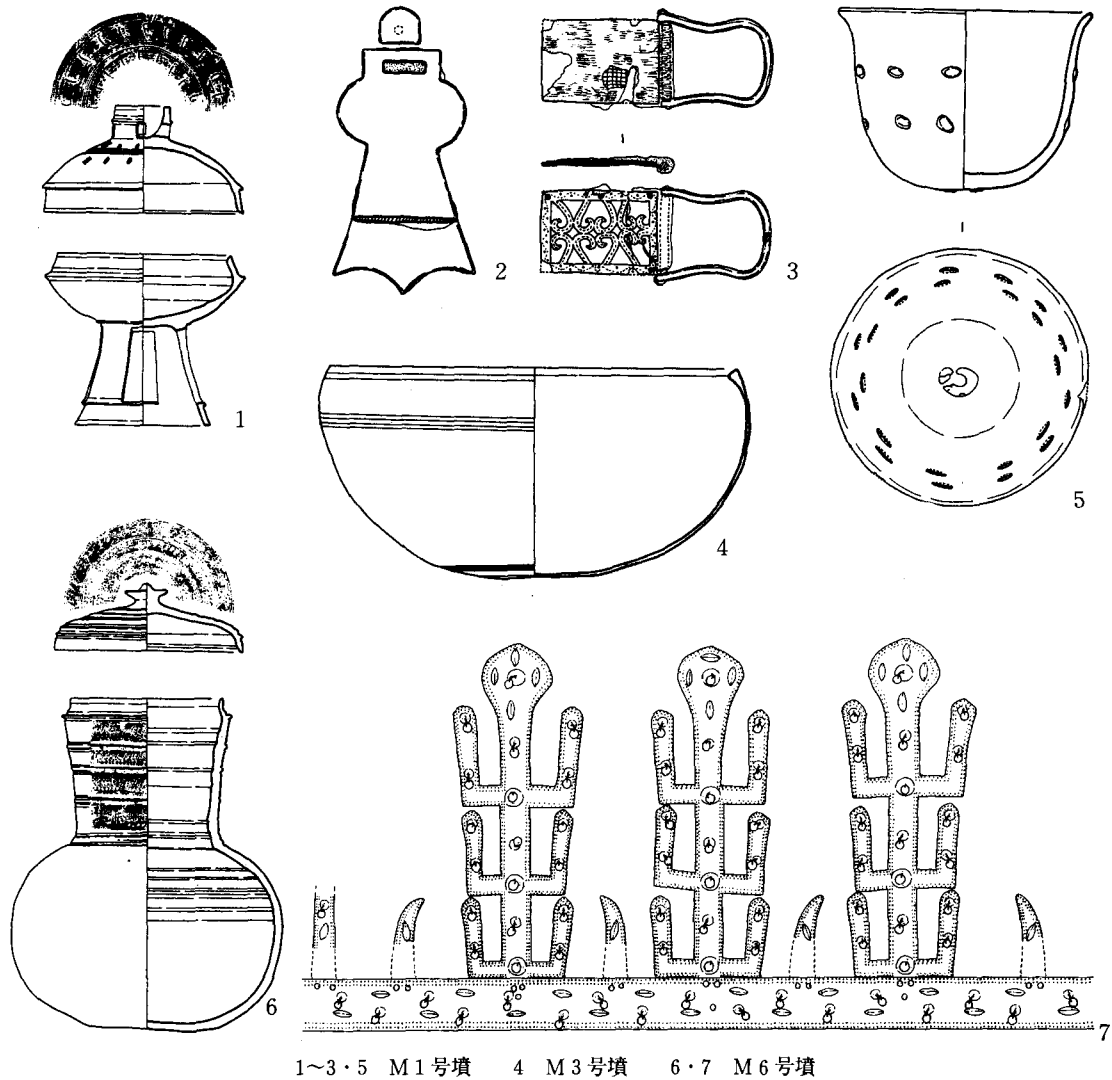


図2 玉田古墳群出土外来系考古資料 (1・6・7:縮尺約1/5, 2~5:縮尺約1/3)

ローマングラス (図2-5) も、慶州での類例が知られるものである。この段階における百済系の考古資料としては、M3号墳出土の銅製鏡 (図2-4) があげられる [李漢祥1994]。また、23号墳 [趙榮濟他1997] 出土の金銅製冠帽や環頭大刀についても、形態的・技術的な影響が百済からあった可能性を検討すべきだろう [成正鏞2002]。倭系遺物については、68号墳 [趙榮濟他1995] 出土の三角板革綴短甲や28号墳 [趙榮濟他1997] 出土の横矧板鋌留短甲等類例は限られている。

一方、玉田古墳群の墓制は、M3・M4号墳が築造される段階で、大きな変化をみせる。まずM3号墳の築造以後、高霊様式土器 (図2-6) が主に副葬されるようになる。さらに、M4号墳・M6号墳 [趙榮濟他1993] では隔壁がなくなり、池山洞墳群の竪穴式石槨と同様に平面が細長方形となる。こうした墓制の変化については、玉田古墳群の被葬者集団が大加耶に取り込まれたことを反映していると理解する説がある [金世基1995]。ただし、埋葬施設や副葬品の様相の変化にもかかわらず、玉田古墳群の高塚古墳は、同一丘陵上で東から西に向けて築造が続けられている。また、

竪穴式石槨内部の空間原理や、石槨内部につくられた、木棺と呼びうる木製構造物の構築方法には変化がなく [吉井 2002b], 埋葬原理と関連する最低限の伝統は守られ続けたと考えられる。さらに、M6号墳に副葬された新羅系の山字形冠 (図2-7) のように、洛東江以東地域との関係が想定できる遺物の副葬は続く。

墓制の基本的な埋葬方式の連続性からみて、玉田古墳群にみられる墓制の変化は、被葬者集団の交代ではなく、在地の集団が周辺地域から新たな墓制要素をとり入れることにより引き起こされたこととみることができよう。こうした墓制の様相は、外来系考古資料は出土しつつも、それにより墓制の大きな変化がみられない池山洞古墳群の様相とは異なる。そして両者の様相の違いは、加耶地域における社会的・政治的な関係と位置づけの違いに求めることができるのではないかと考えられる。

また、外来系考古資料の様相からみたとき、玉田古墳群の墓制は、加耶地域の一角を占めながら、周辺地域との関係では洛東江以東地域との関係が目立つ。これは、玉田古墳群が洛東江に隣接し、なおかつ黄江の下流域に位置する、という立地的条件によるところが大きいと考えられる。洛東江は、一般的に加耶と新羅の文化的境界線にあたとされるが、少なくともこの段階では、洛東江の両岸で文化が断絶しているのではなく、川を挟んで種々の文化的な要素が重なり合っている、というのが実態に近いのであろう。同様の状況は、加耶地域の西側でも想定できる。例えば、鎮安黄山里古墳群 [郭長根 1999] では、高霊様式土器と百濟土器がよく似た比率で副葬されている。加耶地域と周辺地域との関係を考える場合、このような境界地域に位置する集団の役割を、今後、さらに積極的に考えていく必要があるだろう。

## 小結

以上、二つの古墳群の検討から、竪穴式石槨が主たる埋葬施設として用いられた段階における外来系考古資料の様相と、それが被葬者集団とその墳墓の築造に与えた影響についての特徴をまとめると、次のようになる。まず、外来系考古資料の様相を通して、この段階の加耶諸国が、隣接する諸集団およびやや離れた地域である百濟・新羅・倭と多様な交渉関係を結んでいたことがわかる。そして、外来系考古資料の具体的な出現状況は、古墳群ごとの性格や交渉相手との関係により違いがみられ、それが交渉の性格の違いを反映している可能性を指摘できる。倭系の考古資料を通して加耶との交渉関係を考える際には、加耶と倭以外の地域との交渉のあり方と比較検討して、その特色を明らかにしていく必要があるだろう。

次に、加耶といっても、立地条件や加耶地域内における社会的・政治的位置づけにより、周辺地域との関係や墓制の変化の様相が多様であることがわかる。また、文献記録や、洛東江という河川によって設定される加耶地域の境界は、必ずしも文化的な要素の広がりやの厳密な境界とはなっていない、という点にも注意しておきたい。今回、検討の対象としてとりあげた池山洞古墳群と玉田古墳群は、日本列島でみつかるとして外来系考古資料の起源を考える際にしばしば参照されてきた古墳群である。しかし、少なくとも、考古資料を通して当時の地域間交渉の実態を検討する際には、両古墳群を「加耶」という概念の元に一括して扱う前に、両古墳群の加耶地域における政治的・社会的地位と立地条件を個別に検討したうえで、日本列島との関係を検討していく必要があるのではないだろうか。



## ②……………横穴式石室の展開と外来系考古資料

6世紀にはいり、加耶地域に本格的に横穴式石室が導入される段階になると、前章でみたような墓制の分布圏と地域間関係に大きな変化がみられることになる。加耶が滅亡して新羅的な横穴式石室と墓制が本格的に流入する以前の段階に、加耶地域で築造されたと思われる横穴式石室の構造には、いくつかの類型があることが明らかになってきた。その中でも比較的類例が多いものとして2種類の横穴式石室をあげることができる。

まずあげられるのは、玄室の長幅比が3:1前後と細長い石室である。このタイプの石室は、晋州(水精峯2・3号墳, 玉峯7号墳 [関野1911, 定森他1990], 武村里5号墳 [姜炅希1994])・宜寧(中洞里4号墳 [趙榮濟他1994])・咸安(道項里4・5・8 [李柱憲1999]・47号墳 [李柱憲2000a])・固城(蓮塘里18・20号墳 [朴淳發他1994])など、加耶地域でも南海岸沿いの地域に集中する傾向がみられる。玄室の平面形や使用石材の特徴などから、このタイプの石室は在地の竪穴式石槨に羨道がとりつくことで成立したと想定することができる [吉井1997a]。その背景としては、在地の技術的伝統を基盤として百済から新たな墓制のアイデアを導入したことを想定する説 [山本2001] と、羨道のとりつく位置の類似から榮山江流域の横穴式石室との関係を想定する説 [曹永鉉2000] が提示されている。副葬品をみると、在地の土器以外に、高霊様式土器がかなりの比率で伴う。百済と関係するものとしては、晋州水精峯2号墳で百済系と考えられる銅鏡が出土している。また、釘や鍔座金具が出土する機会が多いことから、百済の横穴式石室でもちいられたのと同様の持ちはこぶ木棺 [吉井1995] が用いられたことがわかる。

もう一つは、玄室の長幅比が2:1前後かそれ以下で、穹窿状天井やトンネル状天井をなす石室である。これらは、主に高霊(古衙洞壁画古墳 [金世基他1985], 古衙2洞古墳 [金英夏他1966], 折上天井塚 [梅原1947])・陝川(苧浦里D-I-1号墳 [尹容鎮1987], 玉田M11号墳 [趙榮濟他1995])など内陸地域に集中する傾向がみられる。このタイプの石室は、その構造自体が百済の影響を受けた可能性が高い。また、古衙洞壁画古墳の場合は、壁画を描くための画工の派遣なども想定しうる。出土遺物においては、銅鏡(苧浦里D-I-1号墳), 耳飾(図3-1, 玉田M11号墳)などの副葬品や、持ちはこぶ木棺の存在を推定させる釘や鍔座金具(図3-2・4)などが、百済系の考古資料と考えられる。一方、玉田M11号墳の場合、土器(図3-3)や金銅製沓(図3-5)などの新羅系と考えられる遺物と、鳥形の装飾をもつ有棘利器のような在地系遺物も共存しており、それぞれの遺物の比率はかなり拮抗している [吉井1999]。

一方、ここ数年、加耶地域では倭や榮山江流域の影響が想定しうる横穴式石室の類例が増加して注目を浴びている。たとえば宜寧雲谷里1号墳 [趙榮濟他2000] では、玄室の側壁がいわゆる胴張り状を呈し、奥壁で日本で石棚と呼ばれる構造と類似した構造が確認された。また宜寧景山里1号墳 [慶尚大学校博物館2000] では、石屋形状の構造物が発見されている。さらに、朝鮮半島の前方後円墳の候補にあげられてきた固城松鶴洞1号墳 [沈春謹2001] B号石室は、玄室壁面に赤色顔料が塗布されていたことが明らかになった。また副葬品の中に須恵器甕などが発見されたと報告されている。こうした例のうち、松鶴洞1号墳B号石室については、玄室平面が細長方形であることや、

玄室と羨道の天井部の間に顕著な段差がないこと、そして玄門構造の特徴などから、榮山江流域の長鼓峯古墳石室や群馬県前二子古墳・栃木県権現山古墳との関係が指摘されている [柳沢 2002]。また、榮山江流域の前方後円墳の出現様相との類似性を指摘し、これらの古墳を倭系古墳と規定して、その出現の歴史的背景に迫ろうとする研究も進められている [朴天秀 2002b]。

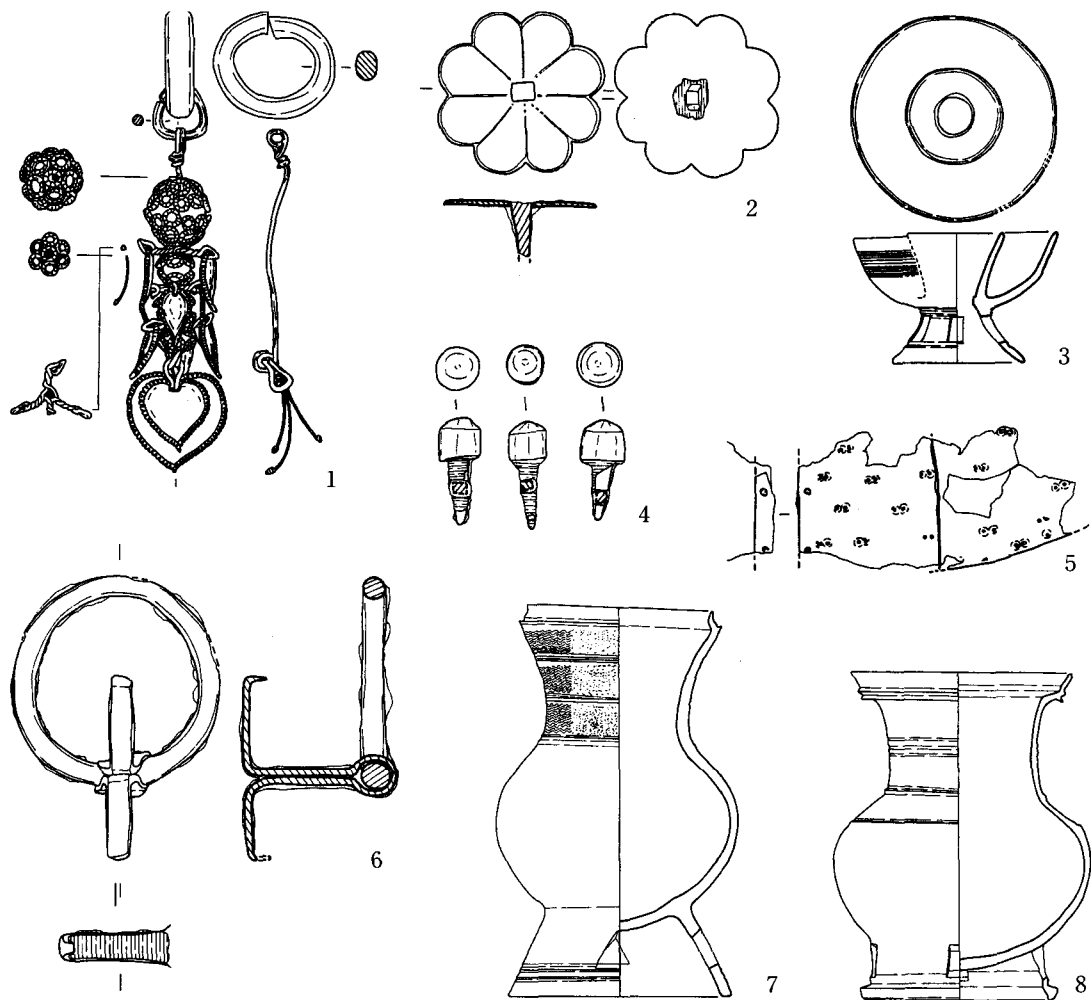
以上のような、6世紀前半における横穴式石室の導入は、加耶地域の墓制と外来系考古資料の様相にどのような変化をもたらしたと評価できるのだろうか。まず指摘できることは、横穴式石室の出現は、単純な埋葬施設構造の変化だけではなく、基本的な葬送観念をも変化させた、という点である [吉井 2002a]。たとえば、横穴式石室の出現と前後して、同一石室内への追葬の風習が認められるようになる。その中には、水精峯2号墳や古衙洞壁画古墳、苧浦里D-I-1号墳のように、百済の横穴式石室で一般的にみられる二人並列葬 [吉井 1997b] がおこなわれたと想定できる例が少なくない。一方、雲谷里1号墳のように4次にわたって棺台がつくられた例は、新羅系の横穴式石室によくみられる埋葬方式である。さらに、まだ未報告なので詳細な検討が進められないが、景山里1号墳の石室形状の構造物は、北部九州とのつながりを暗示している。

また、百済起源と考えられる鍔座金具と釘から構成された木棺は、石室の構造差や地域差を越えて広く認められる。こうした木棺は、堅穴式石槨墓で確認される鏝や釘で緊結された木棺 [吉井 2000] とは構造的にも機能的にも大きく異なる。そして、苧浦里D-I-1号墳や玉田M11号墳のように、金や銀で頭部を装飾する釘が出土した例から、百済での類例と同じく、装飾された木棺が使われたことがわかる。詳細は別稿で検討する予定であるが、このような木棺の受容は、単なる木棺構造の変化だけではなく、納棺儀礼のおこなわれた場所や古墳自体のもつ意味に大きな影響を与えたと考えられる。

もう一つ注目すべきは、古墳の副葬品に複数の地域からの外来系考古資料が確認され、その数も多い点である。土器においては、在地系土器以外に、高霊様式土器 (図3-7) がかなりの比率を占める例が多い。そうした例の中に、それ以前には高霊様式土器の出土があまり知られていなかった晋州・咸安・固城の古墳が含まれることは興味深い。一方、南海岸に近く、また532年に金海を併合してさらに西方へ領域を広げつつあった新羅に接する位置にあった宜寧・固城地域の古墳では、新羅系土器 (図3-8) と倭系土器の出土例が少なくない。装身具などの威信財の場合でも、玉田M11号墳のように百済系と新羅系が混在している例がある。

このように、加耶地域における横穴式石室の導入は、従来の墓制・葬制を大きく変化させただけでなく、堅穴式石槨を埋葬施設とする墳墓にくらべて、複数の地域に由来する外来系考古資料の量の増加を引き起こしている。これまでの研究では、こうした変化を、加耶地域に対する百済の進出と関連づけて説明することが一般的であった。しかし、最近の調査成果は、倭系や新羅系の考古資料が少なからず存在することを明らかにしており、単純な理解を難しくしている。もっとも、文献資料を通じた研究によれば、6世紀前半の加耶地域では、その版図をめぐる百済・新羅・倭が争い、それらの勢力と加耶の諸集団の間の関係もめまぐるしく変化したと考えられている。そうした事実を念頭におけば、この時期の墓制・葬制にみられる複雑な様相は、ある程度理解することができるのかもしれない。

また、こうした状況が、前方後円形墳をはじめとする同時期の榮山江流域の墓制にも見いだされ



1~5 玉田M11号墳 6~8 雲谷里1号墳

図3 横穴式石室噴出土外来系考古資料 (1・2・4~6:縮尺約1/3, 3・7・8:縮尺約1/5)

ることは、加耶地域における墓制・葬制の変化を考える上で注目される点である。たとえば、前方後円形墳の被葬者を栄山江流域の支配のために派遣された倭系の百済関連集団と考える朴天秀 [朴天秀 2002a] は、加耶地域における、倭系の要素が強くて単独で存在する古墳の被葬者についても、大加耶のもとで倭・百済・新羅との間の交渉に活躍した倭人であると推定する [朴天秀 2002b]。こうした解釈は、日本考古学の研究者にとって非常に魅力的なものであろう。ただここで注意すべきことは、玉田古墳群・松鶴洞古墳群・道項里古墳群・蓮塘里古墳群など、それ以前から墳墓の造営がおこなわれてきた古墳群においても、複数の外来系考古資料が混在した様相を示す点である。このような、在地の被葬者集団が主体であることが想定しうる古墳群における変化の様相と対比することで、朴天秀が指摘した倭系の要素が多くを占める古墳築造の歴史的背景や被葬者の検討を、より深化していくことができるだろう。

さらにいえば、ほぼ同時期の百済・新羅、そして日本列島においても、6世紀前半に横穴式石室の導入により墓制・葬制は大きな画期を迎えたことを指摘できる [吉井 2002a]。そうした意味で、

この段階の加耶地域における、倭系をはじめとする外来系考古資料の様相とその歴史的背景を明らかにすることは、同時期の日本列島における横穴式石室の受容・普及と、そこにみられる外来系考古資料を通して「渡来人」や「渡来文化」の実相を検討する研究と、相互に関連しているとみることができる。日韓両国の考古学においては、自国の文献資料との照合から、外来系考古資料の出現に対する解釈を導き出すことが、これまで一般的におこなわれてきた研究方法である。しかし、6世紀前半における各地域の墳墓にみいだされる外来系考古資料の出現様相を比較検討し、そこからある程度普遍的な解釈を導き出し得る枠組みを構想する作業を、今後進めていく必要があるだろう。

## おわりに

以上、本稿では、竪穴式石槨と横穴式石室が埋葬施設として用いられる段階において、倭系をはじめとする外来系考古資料がどのように出現し、その分析を進める上でどのような視角が必要であるかについて、初歩的な検討をおこない、若干の問題提起をおこなった。先述したように、古墳時代における加耶と倭の関係は、両集団にとって重要なことであったと思われる。しかし、両地域の交渉を日本考古学的な解釈の枠組みだけで理解していくことは、従来の対外交渉に対する認識を再生産することはあっても、加耶の実態や倭との交渉の様相を正しくするには限界があると考えられる。今後は、朝鮮半島と日本列島の諸地域間の交渉関係を多様な角度から分析する中で、加耶と倭の交渉の実態を明らかにしていき、その過程で日韓両国の考古学・古代史研究の問題点を明らかにしよう。このような学術的な交流と研究が進んでいくことを期待しつつ、本稿を終えたい。

## 引用文献

(韓国語文)

- 郭長根 1999 『湖南東部地域石槨墓研究』 書景文化社  
姜兪希 1994 『晋陽武村里加耶墓』 国立晋州博物館遺跡調査報告書第9冊 国立晋州博物館・晋陽郡  
慶尚大学校博物館 2000 『宜寧景山里古墳群発掘調査』(現場説明会資料)  
金吉植 1991 「遺物(考察)」『天安花城里百濟墓』 国立公州博物館  
金世基 1995 「大伽倻墓制의 變遷」『加耶史研究—대가야의 政治와 文化—』 高靈郡  
金世基・曹永鉉・金秉柱 1985 「高靈古衙洞壁面古墳実測調査報告」啓明大学校博物館遺跡調査報告第2輯 啓明大学校博物館  
金英夏・尹容鎮 1966 「高靈古衙二洞古墳調査報告」『仁同・不老洞・高靈古衙古墳発掘調査報告』慶北大学校博物館叢刊第2冊  
金鍾徹 1979 「高靈池山洞第45号古墳発掘調査報告」『大伽倻古墳発掘調査報告書』 高靈郡  
—— 1981 『高靈池山洞古墳群 32~35号墳・周辺石槨墓』啓明大学校博物館遺跡調査報告第1輯  
—— 1982 「大伽倻墓制의 編年研究」『韓国学論集』9  
朴淳發・李相吉 1994 『固城蓮塘里古墳群』慶南大学校博物館叢書5 慶南大学校博物館  
朴升圭・河真鎬・金壽鏡 1998 「高靈池山洞30号墳」嶺南埋蔵文化財研究院学術調査報告第13冊 嶺南埋蔵文化財研究院・高靈郡  
朴天秀 1996 「大伽耶의 古代国家形成」『碩晤尹容鎮教授停年退任紀念論叢』(日本語訳1997「大伽耶の国家形成」『東アジアの古代文化』90号)  
—— 2000a 「考古学資料를 통해 본 大伽耶」『考古学을 통해 본 加耶』韓国考古学会学術叢書1 韓国考古学会  
成正鏞 2002 「大伽倻와 百濟」『大伽耶와 周辺諸国』 高靈郡・韓国上古史学会  
山本孝文 2001 「伽耶地域横穴式石室의 出現背景」『百濟研究』第34輯 忠南大学校百濟研究所

- 吉井秀夫 1997a 「横穴式石室墳의 受容様相으로 본 百濟의 中央과 地方」『百濟의 中央과 地方』忠南大学校百濟研究所
- 2000 「대가야계 수혈식석곽분의 “목관” 구조와 그 성격—吳·眞新의 분석을 중심으로—」『慶北大学校考古人類学科 20 周年紀念論叢』慶北大学校考古人類学科
- 尹容鎮 1979 「高靈池山洞 44 号墳發掘調査報告」『大伽倻古墳發掘調査報告書』高靈郡
- 1987 「陝川苧浦里 D 地区遺跡」陝川苧浦水没地区發掘調査報告 5 慶尚南道・慶北大学校考古人類学科
- 尹貞姬 1997 「小加耶土器의 成立과 展開」(慶南大学校大学院碩士學位論文)
- 李殷昌・梁道榮・金龍星・張正男 1991 「昌寧桂城里古墳群—桂南 1・4 号墳—」學術調査報告第 9 冊 嶺南大学校博物館
- 李在賢 1994 「嶺南地域木槨墓의 構造」『嶺南考古學』15 嶺南考古学会
- 李柱憲 1999 「咸安道項里古墳群 II」學術調査報告第 7 輯 国立昌原文化財研究所
- 2000a 「咸安道項里古墳群 III」學術調査報告第 8 輯 国立昌原文化財研究所
- 2000b 「阿羅加耶에 대한 考古學的檢討」『가야 각국사의 재구성』民族文化學術叢書 20 해안
- 李漢祥 1994 「武寧王陵出土品追報(2)—銅製容器類—」『考古學誌』第 6 輯, 韓國考古美術研究所
- 鄭昌熙・權惠仁・金東淑・李貞和・文真英・韓真蓮・鄭英煥他 2000 「大伽耶歷史館新築敷地内高靈池山洞古墳群」學術調査報告第 6 冊 慶尚北道文化財研究院・高靈郡
- 趙榮濟 1996 「玉田古墳의 編年研究」『嶺南考古學』18 嶺南考古学会
- 2002 「考古學에서 본 大加耶連盟體論」『盟主로서의 金官가야와 대가야』金海市第 8 回加耶史學術會議發表要旨 金海市
- 趙榮濟・朴升圭 1990 「陝川玉田古墳群 II」慶尚大学校博物館調査報告第 6 輯 慶尚大学校博物館
- 趙榮濟・朴升圭・金貞禮・柳昌煥・李瓊子 1992 「陝川玉田古墳群 III」慶尚大学校博物館調査報告第 7 輯 慶尚大学校博物館
- 趙榮濟・朴升圭・柳昌煥・李瓊子・金相哲 1993 「陝川玉田古墳群 IV」慶尚大学校博物館調査報告第 8 輯 慶尚大学校博物館
- 趙榮濟・朴升圭・柳昌煥・李瓊子・金相哲 1994 「宜寧中洞里古墳群」慶尚大学校博物館學術調査報告第 12 輯 慶尚大学校博物館
- 趙榮濟・柳昌煥・李瓊子 1995 「陝川玉田古墳群 V」慶尚大学校博物館調査報告第 13 輯 慶尚大学校博物館
- 趙榮濟・柳昌煥・李瓊子 1997 「陝川玉田古墳群 VI」慶尚大学校博物館研究叢書第 16 輯 慶尚大学校博物館
- 趙榮濟・柳昌煥・河承哲・孔智賢 2000 「宜寧雲谷里古墳群」慶尚大学校博物館研究叢書第 22 輯 慶尚大学校博物館
- 洪潛植 1994 「豎穴式石槨墓의 型式分類과 編年」『伽耶古墳의 編年研究 II—墓制—』第 3 回嶺南考古学会學術發表會發表要旨討論要旨 嶺南考古学会
- (日本語文)
- 梅原末治 1947 「朝鮮古代の墓制」
- 木下尚子 2001 「古代朝鮮・琉球交流試論—朝鮮半島における紀元 1 世紀から 7 世紀の大型卷貝使用製品の考古學的檢討」『青丘學術論集』第 18 集 財団法人韓國文化研究振興財団
- 2002 「韓半島の琉球列島産貝製品—1~7 世紀を対象に—」『韓半島考古學論叢』すずさわ書店
- 定森秀夫・吉井秀夫・内田好昭 1990 「韓國慶尚南道晉州水精峯 2 号墳・玉峯 7 号墳出土遺物—東京大学工学部建築史研究室所蔵資料の紹介」『朱雀』第 3 集 京都文化博物館
- 沈奉謹 2001 「四壁を赤彩した横穴式石室—韓國・固城松鶴洞古墳群」『季刊考古學』第 77 号 雄山閣
- 関野貞 1911 「伽倻時代の遺跡」『考古學雜誌』第 1 卷第 7 号 日本考古学会
- 曹永鉉(吉井秀夫訳) 2000 「新羅・加耶の横口・横穴式石室墳」『月刊考古學ジャーナル』No461 ニュー・サイエンス社
- 朴天秀 2002a 「梁山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」『考古學研究』第 49 卷第 2 号 考古學研究会
- 2002b 「梁山江流域と加耶地域における倭系古墳の出現過程とその背景」『古墳時代の日韓交流—熊本の古墳文化を探る—』肥後考古学会・熊本古墳研究会
- 柳沢一男 2002 「日本における横穴式石室受容の側面—長鼓峯類型石室をめぐる—」『悠山姜仁求教授停年紀念東北亜古文化論叢』悠山姜仁求教授停年紀念論叢編纂委員会
- 吉井秀夫 1995 「百濟の木棺—横穴式石室墳出土例を中心として—」『立命館文學』第 542 号 立命館大学人文学

---

会

- 1997b 「百濟横穴式石室墳の埋葬方式」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会
- 1999 「朝鮮三国時代における墓制の変遷からみた「渡来」『渡来文化の受容と展開—5世紀における政治的・社会的変化の具体相(2)—』(第46回埋蔵文化財研究会発表要旨集)埋蔵文化財研究会
- 2002a 「朝鮮の墳墓と日本の古墳文化」『倭国と東アジア』(日本の時代史2)吉川弘文館
- 2002b 「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』第49巻第3号 考古学研究会

(京都大学大学院文学研究科)

(2003年5月12日受理, 2003年7月18日審査終了)

## 고고자료를 통해서 본 한반도 諸國과 倭

吉井秀夫

本稿에서는, 加耶지역이 倭와 韓半島의 주변 지역과 어떠한 교섭관계를 맺었는지를 밝히기 위한 한가지 시도로서, 竪穴式石槨과 橫穴式石室이 주된 매장시설로서 사용되었던 단계의 加耶지역 墓制에 있어서의, 外來系考古자료 양상에 대해 검토했다. 우선 竪穴式石槨이 매장시설로서 사용되었던 단계에서는, 加耶地域內와 그 인접지역으로부터 土器의 반입이 보여지는 것 외에, 倭·百濟·新羅系의 考古자료가 존재한다. 단, 그것들이 墓制전체에서 차지하는 비율은 한정되어 있다. 또, 池山洞古墳群과 玉田古墳群에서는, 영향을 받은 지역과, 墓制에 미친 영향의 정도에 차이가 있다. 한편, 橫穴式石室이 주된 매장시설로서 채용되었던 단계가 되면, 매장시설의 구조가 변화하는 것 뿐만 아니라, 葬送觀念에도 큰 변화가 있었다. 또 부장품에 있어 外來系考古資料가 차지하는 비율도 증가한다. 이러한 변화에 대해서는, 百濟로부터의 영향이 지적되어 왔지만, 新羅·倭로부터의 영향도 적지않게 보인다. 그 중에서도 倭系考古資料가 눈에 띄는 墳墓에 대해서는, 榮山江流域의 前方後圓形墳의 양상과의 대비로부터, 被葬者를 大加耶支配下의 倭系집단으로 보는 설이 제출되어있다. 그러나, 그 이전부터 古墳이 築造되어 왔던 古墳群이나 일본열도에서도, 같은 변화가 보여지는 것을 염두에 두고, 墓制 변화의 유형화와 그것에 대한 해석이 행해져야 할 필요가 있다고 생각한다.

## **The Interaction between the Ancient States in Korea and Wa Viewed from the Archaeological Materials**

YOSHII, Hideo

This paper sheds light on the kind of relations that were formed by Gaya with Wa and other regions of Korean Peninsula through an examination of foreign archeological materials found in the entombment systems of the Gaya region where burial facilities comprised mainly of stone-lined tombs with an upper entrance and stone chamber tombs with a side entrance. First, during the stage when stone-lined tombs with an upper entrance were used as burial facilities not only is there evidence that earthenware was brought to these tombs from within Gaya and neighboring areas, but there are also archeological materials of the Wa, Paekche and Silla styles. However, the proportion of objects of these latter styles found in all entombment systems is limited. Furthermore, in the tombs found at Chisan-dang (池山洞) and Okjon (玉田), differences are evident between the regions that were influenced and the extent of the influence of entombment systems. At the stage when stone chamber tombs with a side entrance had been adopted as the main type of burial facility, in addition to the structural changes in these burial facilities it is recognized that a huge shift had taken place with respect to the concept of burial. This stage is also marked by an increase in the proportion of foreign archeological materials among funerary accessories. Although it has been suggested that this change was due to influences from Paekche, more than a few influences from Silla and Wa are also evident. A comparison between these tombs with noticeable amounts of foreign archeological materials from Wa and the keyhole tombs of the Yeongsang-gang Basin has led to the theory that the dead in these tombs were groups from Wa who were under the control of Dae Gaya. However, bearing in mind that similar changes are to be seen in tombs which were built in Gaya from the 4th A.D. and in tombs which were built in Japan, classification of changes in entombment systems and an explanation of these classifications is needed.